



Profile — 金子隆芳

1928年、東京生まれ。1952年、東京文理科大学卒業（心理学専攻）。同年米国ミズーリ州立大学大学院に留学し、1954年、修士課程終了。東京教育大学教授、筑波大学教授を経て、1992年、定年退職。現在は筑波大学名誉教授。専門は実験心理学。著訳書は『脳から心へ：心の進化の生物学』（単訳、新曜社）など。

海外事情についてとくにお話すべき体験を私は持ち合わせませんが、私の留学について何か、ということならば、1952年からほぼ2年間のミズーリ州立大学のことになります。したがって半世紀以上前のことですが、私の場合はガリオアと称する戦後アメリカの日本占領政策の一環で、そのグランティーターとして行かせてもらった大勢の一人です。フルブライトはたしかその翌年からで、したがって私たちはガリオア・フルブライト留学生と呼ばれます。私が意外に思ったことは（あるいは認識不足だったのかもしれませんが）、当時は為替も自由でなく、しかも1ドルが360円という時代で、海外留学は難しいことと思こんでいたのですが、「蛇の道は蛇」だかなんだか、日本からの学生や研究者がすでに結構いたことでした。

ミズーリ州はだいたい合衆国の真ん中で、大学のあるコロンビヤの街はさらにまたその真ん中なので、彼らは“Heart of America and Heart of Missouri”という意識です。

私の米国留学

筑波大学名誉教授

金子隆芳（かねこ たかよし）

私にとっては日本が負けて降伏調印式が東京湾のアメリカ戦艦ミズーリ号上で行われた、そのミズーリでした。関連して余計なことを言えば、私たちが羽田を発ったパンアメリカン航空の飛行機はボーイング・ストラトクルーザーといっていて、戦争中、日本本土を散々に空襲したB-29爆撃機を改装したものです。今のように一気に米国本土に飛べず、ウェーキ島、ホノルル、サン・フランシスコと3段飛びでした。

ミズーリ大学では大学院にエンロールしましたが、定員があるのかなのか不明で、入試があったわけでもありません。講義には大学院の講義というのがあるでもなく、ともかくいろんな講義を学部生と一緒に受講しました。院生たるもの、もう一度、心理学を一から勉強し直せ、ということです。院生には学部で心理学の専攻でなかった学生もいるでしょうし、他大学で心理学をやってきたといっても信用できませんから、このシステムはもともとです。私は日本では旧制大学で心理学を専攻しましたが、旧制大学の心理学の教育は今と比べればお粗末なものでした。教授一人ひとりはいわゆる偉い学者であっても、なにしろ学生定員も少なければ、講座数（したがって教授定員）も、修業年次も少ない、非常勤枠も貧弱というわけで、広く心理学を勉強するという環境でなかったことはたしかです。その代わりというか、自学自習的な卒業論文の比重が高かったものでした。そういう次第でしたから、

私としてはアメリカで初めて心理学の勉強らしい勉強をしたといえるかもしれません。おかげで専門外のことについても、すっかりもの知りになりました（と帰国後、皆さんには思われたらしい）。

修士課程の1年次が終わると、コンプと称する総合試験（comprehensive examination）があって、これをパスしないと2年次にリサーチ・コースを履修できず、したがって修士論文も書けないという寸法です。私はもともと感覚の生理心理学に興味がありましたので、脳波実験室があったのを幸いに、脳波の光駆動の実験で修士論文を書くことができました。その頃、日本の大学の心理学研究室にはどこにも脳波記録計はありませんでした。ミズーリの脳波計も2チャンネルの感熱紙記録の粗末なものでした。

日本の心理学に新型の脳波計が入ってきたのは、私が帰国した1954年でした。アメリカで仕込んだいろいろな新しい知識（と思ったこと）も、帰国してみたら日本でも結構話題になっていて、いまだき当然のことではあります。知識世界もグローバルです。知識情報の収集ということでしたら、ある程度はなにもわざわざ外国に出かけなくても、といえるかもしれませんが、アメリカでの勉強や研究を通して感じたことは、向こうは「万事やりやすい環境だ」ということでした。日本はどうも万事がやりにくく、非能率的だったように思います。しかし、これも過去のことかもしれません。